

ツバメには、王子のかたまで飛びあがるだけの力しか、残っていませんでした。「さようなら、愛する王子様」ツバメは、ささやくように言いました。「あなたが、とうとうエジプトに行くのは、わたくしも、うれしいよ、小さなツバメさん」と、王子は言いました。「あなたは、ここに長くいすぎた。でも、わたくしもあなたを愛しているんだよ」「わたくしは、エジプトに行くのではありません」と、ツバメは言いました。「死の家に、行くんです。『死』というのは、『ねむり』の兄弟ですよね」そして、ツバメは幸福の王子の足元に落ちていきました。そのしゅ

んかん、ぞうの中で、何かがかくだけたようなきみょうな音がしました。それは、なまりの心ぞうが、ちょうど二つにわれた音なのでした。次の日の朝早く、市長が市会議員たちと一しょに、ぞうの下の広場を歩いておりました。柱を通りすぎるときに市長が、ぞうを見上げました。「おやおや、この幸福の王子は、何てみすぼらしいんだ」と、市長は言いました。「何てみすぼらしいんだ」市会議員たちは、さげびました。かれらは、いつも市長にさんせいするのです。みんなは、ぞうを見ようと近よっていきました。「ルビーはけんからぬけ落ちてるし、目もすっかり

両方とも、なくなっているじゃないか。これは、どうしたことだ。このぞうは、幸福の王子という、なまえではなかったのか」「本当に、どうしたことでしょう。これでは、名前とは、ちがうぞう